信仰体験を語る

つながり広がり伝わる心

大本山光長寺　塔頭西之坊檀信徒
山本 吉明さん
芙美子さん

左　吉明さん　右　芙美子さん

●はじめに

宮村　戦後、この光長寺の辺りから海が見えて、米軍の船から物資を馬車に運び入れた様子が見えたと聞いたことがあります。時代や文化も感じる情景ですが、そんな移り変わりも含めて本日はいろいろなお話をお聞かせいただけたら幸いです。

吉明さん　道には何かしらの名残が残りますよね。学園通りは戦時中から同じ道幅で海軍工廠（こうしょう）があって、飛行機が離着陸出来るようにとあの道幅で作ったみたいですよ。

宮村　興隆学林生が錬行に来て、街頭唱題行をするのですが、「日蓮大聖人が歩いた道」の真上を確実に歩くことの出来ている自分。そこでお題目を唱え、聞いてくれて手を合わせてくれている昔からの皆さま。それらを感じ取り涙する学生もいます。

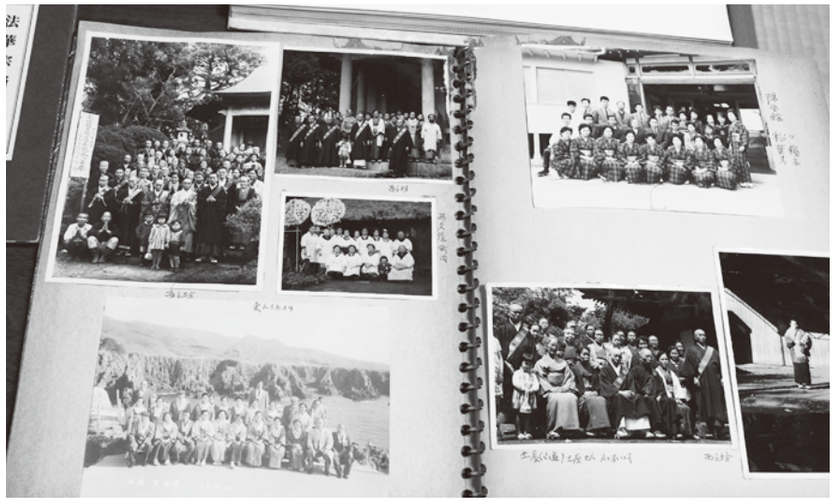
山本家は、どんな道程を経て光長寺とのつながりを持たれたのかお教えいただけますか。

●地域とのつながり、お題目とのつながり

吉明さん　昭和十六年にここ岡宮（おかのみや）に引っ越してきたのですが、当時の家は韮山（にらやま）の江川邸と同じ造りだったのです。

芙美子さん　ひいおばあさん（いそさん）はここ岡宮に来て、近所の人の輪に入れるようにと考えたら、まずはお寺へのお参りがあったようです。お位牌やお墓は前の土地にまだある中で、五つの坊全てにお参りを始めたようです。お陰ですぐに近所の人と馴染むことができたみたいですね、それがいそさんの代のことです。

▲旧家にて。当時の文化と様子が凝縮されている



▲近所の皆さまとの各所参拝の記録

吉明さん　いわゆるお講がなければ、近所付き合いはもちろん、旅行にも行けない時代だったのではないかなと思いますから、楽しみにもしていたようです。

宮村　私自身が他所から来ましたので余計に感じることは、自然とお寺のことを気にかけてくれている、人々、風土というのが特にこの岡宮周辺では強く感じられるのですが、お嫁に来られた芙美子さんはその辺の違いについては何か感じましたか。

芙美子さん　私は長泉町からここへ来ました。ちなみに実家の菩提寺の本山は身延山でした。実はこちらに来てからも、町内には身延山にお参りする人もちらほら見えました。子供達が小さい頃に七面山に登って泊まったことがすごく印象に残っています。確かに熱心な方は多かったですが、お経も太鼓も違いがほぼなかったので、戸惑うようなことはなかったですね。

吉明さん　西之坊の代々のご住職とか、関西から来た僧侶の方とか、それぞれお経の読み方が少しずつ違いますよね。ところ違えばそれぞれなのだなぁと思っています。

芙美子さん　よくお寺さんが言っていたのは、この地域のおばあさん達に育てられながら拝み方を成長させてもらうのだから、どんどん関わってくださいと。

宮村　この南無妙法蓮華経に関われたことが功徳ですからね、そこには僧侶だから、檀信徒だから、こういう読み方だから、の違いはなくて、我々がお互いにより真剣にほとけさまと向かい合えるように成長することこそが大切ですよね。

●信仰の中で感じていくこと

宮村　お題目に関わっての功徳ということを感じたことはありますか。

吉明さん　今の住職（筆者）の入院式の日に右手指三本を大怪我をしまして。それでも今こうして日常生活を送れていることがまず一つ。それからしばらくして、その大怪我について御前様から聞かれた時にふと「お題目のおかげで大難が小難にしていただきました」と口から出たのですよね、私自身がびっくりしました。お経の中ではなくて、住職が祈願？の中で言上して下さっていたからですかね。あぁ、染み込んでいるんだなと。

芙美子さん　私自身も大病の経験があります。手術室に入るときも麻酔が効くまで、それこそ歯医者さんでも、おばあさんが亡くなったときも、お題目をあげて身体をさすりながら送ることができました。自然と、というところに安心を感じています。

吉明さん　観光などで他の宗派のお寺にお参りしても、思わずお題目を口に。（笑）

宮村　お題目の種という表現をしますよね、その種は必ず開くときが来るのですね。

●関わりが広がりを生む

芙美子さん　お盆のときには、孫たちと一緒に盆飾りをして、仏壇でお経をあげて、終わったらみんなで「いつもお守りありがとうございます」と言って、ご先祖様の写真を見せて、「あのおばあちゃんたちが守ってくれているんだよ」と伝えます。

今の人たちは、与えることより、欲しい、が強いと思うのです。だから、お陰様とか感謝の気持ちを育てるには、特にお盆が大事と思っています。それをしないと繋がっていかないのです。最初は関心がなかった子でも、自然とまず仏壇に手を合わせるようになりました。そこに含んだ、命の大切さ、心の拠り所の大切さがわかれば、何か辛いことがあった時でも、ふと顔が思い浮かんだり、おばあちゃんがあぁ言っていたなと思いだしたりして、結果それが支えになってくれたらありがたいと思います。

宮村　今はＳＮＳがありますから、よくも悪くも簡単につながったり、情報を得たりできます。でも、簡単にそうできる時代だからこそ、根本の考え方、育った環境、経緯、アイデンティティ、そして込められた思いが大切になる、ということですかね。それが外国人の方々を広く受け入れていらっしゃる行動にも繋がっていますか。

▲海外のお客様と西之坊境内にて

芙美子さん　そうですね。ホストファミリーを始めたのはもう四十五年前です。最初にお預かりした子はもう六十歳ほどで、日本に定住して、今は京都で焼き物の販売を世界に向けてしています。それからオーストラリア大使館で働いている子は、今度双子が生まれると連絡をくれました。「山本さんのファミリーはＧＩＶＥだ、でも海外はみんなＴＡＫＥだ。そこに日本の素晴らしさがある」そう教えてくれました。私自身は生まれが封建的な家でしたが、子どもたちや孫は言葉や文化に臆したり構えたりすることなく、誰にでも興味を持って接し過ごしてくれているのが嬉しいです。

●きっかけをつくるということ

宮村　それは環境の賜物に他なりませんね。人間、いかに興味を持てるか、ですかね。その行動が出来る、背中を押せる場所をいかにして作ってこられましたか。

芙美子さん　どんどんグローバル化される中で、他の文化を知らない、受け入れないではいけないと思いました。特に子どもたちには、いろんな経験をしてもらう、いろんな人に会える、それが子どもたちにとっての財産だと思っているので、これとこれ、と言えないくらい、色んなことをしてきました。

吉明さん　ホストもして、子育て、祖父母の同居、それから沼津高専の子たちの下宿も受け入れていましたから、まぁ大変でしたよね。バイクは禁止だったけど、その子もその友達もみんなうちにバイクを留めて通学していたり。（笑）山本下宿の方が良いと言ってわざわざ下宿先を変える子もいま

した。未だに付き合いがあります。

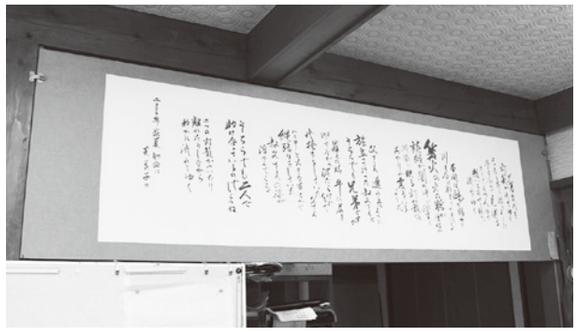
芙美子さん　朝早起きして牛乳を取りに行ったり、勉強を教えてもらったり、子どももわたしたちもたくさんの思い出をもらいましたよね。

宮村　少し脱線しますが、高専の子たちは目がキラキラしているように思います。

吉明さん　何事も自分たちで決めるような校風？制度？なので、一番伸び盛りで経験の多い五年間でしょうね。特に二年間は寮生活で、同じ釜の飯を食べるので、それはすごく大きいことだと思いますよ。

宮村　確かに興隆学林（修行所）にもそういうエッセンスはありますね。

▲書道教室の様子



▲お父様への書

●日々の中に信仰を

宮村　書道教室を中心に、外部での写経体験などもされていますが、どのようなお考えで開かれていますか。

芙美子さん　写経の習慣は、元々習っていた先生の方針でありました。ただ、私の父が亡くなったときに、「そうだ、お題目を書こう、法華経を書こう」とより強く思い立ちました。最近は、余命宣告されたAさんという人がいて「やり残したことは何かと考えたら、お習字をやりたかった」と話されたので、体調の良いときに来て、と通ってもらうようにしたんです。周りの生徒さんも、来る度に生き生きしていく姿を見てびっくりしています。先日も、京都まで行って写経をしてきたそうです。

色々な体験をした人が、心の慰めにしてもらえるような場所、みんなが助けあって支え合っていける場所にこの教室がなれば良いなと思っています。それには、写経はとても大事なことだと思っています。

宮村　その方のご家族も嬉しいでしょうね、写経の功徳は法華経にも説かれていますから。

●これからの時代に繋げたい

宮村　お寺や僧侶に対する期待やお願い、あるいは疑問はありますか。

芙美子さん　祖父母を家で五年間看ていましたので、嫁としての務めを果たしたという気持ちの一方で、淋しさが募ってきました。お寺さんから一言労いの言葉があれば残された家族は救われるかなと思ったことがありました。

吉明さん　お葬式自体も、法事の仕方も変わってきていますね。全ての関わりが希薄になっていって、簡略化ばかりしてどこへ向かってどうなって行くのだろう。

芙美子さん　若い方にそういう傾向がありますよね、町内も少しずつ変わってきているような感じがします。大事さに気づいて、また元に戻るんでしょうけど。

吉明さん　戻るにしても早く気づいてもらわないと、せっかく日本の文化は褒められているのに少し不安です。

宮村　昨今、すごいスピードで新しい職業が増えていますよね。それはもちろん悪いことではなく、それよりもその中で長く深く根付く要因とか、物事の本質とかいうものを、本能的に魅力として感じ取って忘れないようにしないとならない。その点、格言のような示し方でなく、ストーリーでこの妙法蓮華経が残されたというのも、意味があり、意図的な方法だったのかと思っています。

吉明さん　写経ももう少し根付いて欲しくて、そうなるといわゆる「自我偈」はちょっと長いのかなと、集中力が持たない。（笑）

芙美子さん　書き終わると清々しいし、すっきりするような、浄化されたような感覚がありますから、是非広めて行きたいですね。

宮村　先程余命宣告の方の話がありましたが、残されたお子さんがその字を見て感じることもあると思いますから、それも一つの功徳のように思います。

芙美子さん　都度都度字が違いますから、余計に感じることは多いでしょうね。

●本山のため、地域のため、これからのため

宮村　吉明さんは寒行も一緒に歩いて下さっています。

吉明さん　歩くスピードや距離は問題なかったのですが、太鼓を叩くこと、お経をあげながらというのが最初はしんどかったですね。これはほんとに修行だなと。

宮村　それでも前向きに続けられていますね。

吉明さん　きっかけは八品講の役員をして、平成二十七年に当時の日信猊下から「何か本山のために盛り上げていただけませんか」と言われて、「何か」を自分で考えて始めたのです。「寒行に加わって下さい」ではなかったことが、続いている理由の一つかも知れませんね。

芙美子さん　お祖母様の教えがあったことが強いのではないかしら。節分は毎年奉仕者で出られていたし。

吉明さん　特に寒行の太鼓のリズム、寒い時期のあの雰囲気は自分に根付いていましたね。

宮村　今は情報過多の時代ですから、人との交わりを疎（うと）んじる面がありますよね。その中で、私どもにとって一番怖いのは「無関心」。寒行は関わりを作りにいっているようなところもありますよね。うるさいでも、何やってるんだ、でも、それも一つの関わりのスタートですから。素晴らしい行動です。

吉明さん　令和二年からはもっと歩く場所を増やしましょう。出てきてくれる人が現実問題として減ってきているので、少しでも熱心な人がいる間に、そのつながりを周り

▲山本家保存　昭和５０年光長寺節分会資料

▲本年の寒行の様子　左から二番目が吉明さん、その左は娘さん

の人にも見て感じて欲しいです。

芙美子さん　なんでお父さん（吉明さん）が歩いているのか不思議な人もいるかもね。

吉明さん　いると思う。そのことで「一緒に歩きたい」という人を増やしたいですよね。自分の町内だけでも歩いてくれないかなと考えたこともありましたが、自分で実際歩いてきて、やっぱり少しでも若い人を探さないと、そう思いました。

宮村　そういうことを提案してくださる、考えてくださるお檀家さんがいらっしゃるのは本当にありがたいことです。みなさんは自分の仕事があったり、家庭も生活もある中で、一緒になって考えてくださるのですから。

吉明さん　結局それが、先程口にされた「種」なんでしょうね。小さい時はなんでお寺に行くのか、太鼓の音が大きいなぁくらいしか思ってなかったですから。

芙美子さん　子どもたちも訳もわからないうちから太鼓の真似したりして。そういう経験があるから、今は何のためらいもなく手を合わせる。そういう意味では本当に嬉しいことですよね。

吉明さん　子どもは自分で「寒行に行きたい」とか「お寺に行きたい」とは言いづらいから、最初の一回目に親や年寄りが協力していただきたいですね。寒行に限らず、お寺の行事は大事に、なおかつ広報もきちんとしなくてはいけないと思います。

宮村　お寺は地域の戸籍を管理したり、娯楽や情報発信の最先端であった時代もありましたから、そんな要素も兼ねられたら地域の為にもっと役に立てるかなとも思います。今しか出来ないことですからね。

本日は貴重なお時間をありがとうございました。

▲おかげさまの気持ち

●あとがき

本年の寒行は、新しく歩いて下さった方が四名、新しい地域を歩かせていただくことも叶いました。

後日、お二人よりお手紙を頂戴しました。

〝闘病中のAさんは五ヶ月程稽古に来て下さり、写経に向き合って最後の時を過ごしました。「私、たくさんの人達に支えられている、この頃つくづく感じています」と、涙ながらに語り、感謝の心も書に表していました。私達も教室の皆さんも、彼女からたくさんのことを学ばせていただきました、感謝です。〟

このお手紙をお書きになり、お持ちになるお電話をいただいた日、Aさんが息をお引取りになり、ご自身や友人のたくさんの写経に囲まれて旅立ちました。

今一度、拝む思いを大切にしていきませんか？

（宮村光明）